身近な“あたりまえ”から、あらためて考える人権 すべての人が尊重される社会とは

栗本（くりもと）　敦子（あつこ）さん　（Facilitator’sLABO〈えふらぼ〉）

講座２では、Facilitator’sLABO〈えふらぼ〉の栗本敦子さんに「身近な“あたりまえ”からあらためて考える人権 ～すべての人が尊重される社会とは～」と題してご講演をいただきました。ワークショップ形式の時間では、参加者どうしで意見交換が行われました。今回は、講座の一部分を紹介します。

◇マジョリティとは？マイノリティとは？

・マジョリティ…その社会において、文化や生活様式において主流派に属し、決定権を持つ層において多数派を占める人々。多数派は「ふつう」であり、“無色透明”。自分が多数派だという自覚もない。

・マイノリティ…その社会において非主流派、ルールを決める場から疎外されやすい、意見が社会に反映されにくい人々。少数派は否応なく当事者だと自覚する。名づけられ、特徴を語られ、分析される。しばしば、多数派がされない質問をされる。

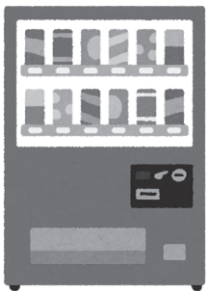
＊マジョリティとマイノリティを分けるのは、数ではなく「社会的な力の偏在」

身の回りのものを見てみると、「右利き」を前提に作られていることが多い

（例）・百ます計算のシート

・自動販売機のお金を入れる場所

→現在では両側に数字のあるシートやお金を入れる場所が自動販売機の中心にあるものが増えてきた。



「普通であること」は、決して私たちに「差別をしない」保証を与えるものではない。むしろ、そこに安住することで、世の中にある差別は確実に生き延びて、育っていくだろう。

つまり、私たちが深く考えることなく「普通に安住すること」は差別にとってこのうえなく良い「こやし」となるのだ。

『差別言論〈わたし〉のなかの権力とつきあう』（好井裕明著、平凡社新書、2007年）

講座のなかで、さまざまなシチュエーションのなかで使われる「ふつう」という言葉の意味や意図を考え、その「ふつう」にはどのような危うさが潜んでいるかをグループで交流しました。一つの事例を紹介しますので、皆さんも「ふつう」について考えてみてください。

事例

Cさんは小学６年生。やんちゃなところがあり、思いがけない行動をして周りを驚かせることもあります。あるとき、クラスメイトともみあいになり教室の窓を割ってしまいました。けが人はいませんでしたが、保護者会で問題になり、「先日、テレビで発達障がいについての特集を見たんですけど、Cさんのためにもふつうの中学校はしんどいのでは…」という発言がありました。

〈参加者アンケートより〉

- 無意識に差別などをしてしまっているかもしれないと気づきました。無自覚こそが一番怖いので、普段から物事を様々な方向から考えて行きたいと改めて感じました。
- 冒頭の「『みんなちがってみんないい』のその先が大切」という言葉にドキッとさせられました。自分自身の行動や子どもへの指導がここで止まってしまっていたなとふり返ることができました。後期に校内で人権フェスティバルがあるので、そのときにいかしたいです。
- マイノリティ、マジョリティ、特権等について、学ぶことができました。学校での人権学習において、今後子どもたちの理解や学びが進むように盛り込みたいと思います。